

こんにちは！嘱託員の鈴木です。

改元から1か月半、ようやく新しい元号「令和」にも慣れてきました。そして今秋10月22日には即位にともなう式典のひとつとして「即位礼正殿の儀」が行なわれます。これは、諸外国の戴冠式にあたるものだそうです。

ところで先日調べ物をしていたら、明治44年(1911)6月23日付『東奥日報』に「戴冠式と本市」「英皇戴冠式と小学校」という見出しの短い記事を見つけました。

この戴冠式とは、ロンドンのウェストミンスター寺院で6月22日に举行されたジョージ5世(1910-1936 在位)の戴冠式です。ジョージ5世は現在のイギリス女王エリザベス2世の祖父にあたり、また皇太子時代にイギリスを訪れた昭和天皇に大きな影響を与えた国王といわれています。

記事によれば、前日の雨も上がり晴れた空に穏やかな風がそよぐ6月22日の青森市内では、「我が同盟国たる英国皇帝陛下」の戴冠式を祝うため、家ごとに国旗を揚げ祝意を表しました。この日は木曜日で、銀行は臨時休業、市内の各小学校では祝賀式が举行され、橋本・浦町両小学校では祝賀式のあとに合浦公園まで校外散歩に出かけました。

また、工藤卓爾市長は青森市民を代表して東京のイギリス大使館にあて祝電を送っています。

遠いイギリスで行われた戴冠式を、青森の人々がこのようにお祝いしたのはなぜなのでしょう？

まず、この頃のイギリスと日本は同盟関係にありました。明治35年1月、ロシアの進出に対抗するため日英同盟が結ばれ、同年2月には青森市でも市公会堂で日英同盟祝賀会が開かれました。そのため、同盟国であるイギリス国王の戴冠式は、日本にとっても慶祝すべき行事だったと思われる。

また、明治39年には青森港が特別輸出港に指定され外国船が入港できるようになり、同年5月には開港記念祝賀会が開かれました。そして、その熱気も冷めない7月下旬にはイギリス艦隊が青森に入港するとの知らせがありました。初めて来る外国の艦隊、しかも唯一の同盟国であるイギリスの艦隊となれば市を挙げて歓迎しなければ！と市民は大いに盛り上がります。しかし、予定日を過ぎても艦隊は現れず、結局濃霧により予定が遅れたため寄港しないことがわかり市民は落胆しました。

その後、翌40年8月に今度は本当にイギリス艦隊が青森港に立ち寄り、市民は大歓迎。短時間でしたが船員たちも上陸し、市街地で買物や冷たい氷水を楽しみました。

さらに、明治43年5月にはロンドンで日英博覧会が開催され、青森市からも篠原善次郎はじめ数名が出品しています。

英国王の戴冠式を他都市でも祝ったのかは調べられませんが、当時の青森市民にとってイギリスは案外と親近感を覚える国だったのかもしれません。